

キリスト教と福沢諭吉の対比

——男女論をめぐる——

比較と対比との区別は比較思想の基礎概念である。比較 (comparison) は相互に関係のある思想同士ないし一方から他方へ影響した思想同士を比べることであり、いわば狭義の比較である。

他方、対比 (analogy) は相互に関係のない思想同士の思想構造を比べることであり、いわば広義の比較を指している。福沢はキリスト教の知識を多少持つており、彼の諸著作の中で自分の思想を述べる一種の材料としてしばしばキリスト教に触れている¹⁾。ランシス・ウェイランドの著書を通じてアメリカのプロテスタントの男女の倫理を知悉していた²⁾と言うことができる。しかし基本的に彼は一生を通じて「宗教の外に逍遙する」立場に立っていたから、男女論をめぐる基本的思想構造からすれば、福沢の思想はキリスト教と無関係であると言えよう。そこでキリスト教の基本的な男女関係の構造と、福沢の基本的な男女関係の構造を比較す

ることは、広義の比較であり、対比することである。本論は福沢の男女論を明らかにするために、キリスト教と福沢を対比することを目的とするのである。

旧約聖書の男女論

ところで創世記³⁾に出てくる天地創造の神話と人間創造の神話とは、中にはヤヴイスト資料と言われる資料が多く比較的古い。とはいえ現代まで資料については多くの説があり確定したわけではない。ここでは旧約聖書の中の夫婦の成立をアダムとハワの神話の中から考えていくことにする。旧約聖書では、女をハワと呼ぶ場合と、イーシャと呼ぶ場合とがある。最初のハワと呼ばれた女の箇所は、創世記3:20の「アダムは女をハワ(命)と名付けた。彼女がすべての命あるものの母となったからである」という

小泉 仰

箇所である。ハワ (HAWAH) というヘブル語は「ハイ (Hay 生きている)」に由来する。やうに創世記：27に「神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された」とある。ここで人というヘブル語は、アダム (ADAM) であるが、これは土すなわちアダーマー (ADAMAH) から造られたので、人は物質に属するものと見られる (創世記：27)。アダムは集団としての人類をさしている。七十人訳は「anthropos」である。初めてヘブル語をドイツ語に翻訳した Martin Luther は「アダム」を Mensch と翻訳している。神は物質的なアダムに命の息 (NISHMATH Hayim) をその鼻から吹き入れた。そこで人間が形成されたというのがこの物語の内容である。この命の息がないなら、人間はただの土の塵 (APHAR) であり、人間は創造されていない。神の命の息が吹き入れられて初めて神と人との関係が成立し、人間たり得たと解釈される。

創世記：7:25節は、ヤーヴィスト資料と言われて比較的古い資料である。創世記：18では神が「人は自分独りでいるのは良くない。彼のために彼に合う助ける者を造ろう。(創世記：18)」と言う。この「彼に合う助ける者」はヘブル語で EZERU KeNeGDô (彼にふさわしい助け手) である。ルター修正訳はこれを「ich will ihm eine Gehilfin machen, die um ihm sei. (彼のためになる助け手を彼のために造ろう)」と訳している。

修正ルター訳は次のような欄外注を付けている。それは「ich will ihm eine Hilfe schaffen als sein Gegenüber (d.h. die zu ihm passet)」という注である。⁽⁵⁾これを訳すと、「私は彼にふさわしい助け手を彼の対応者として造ることにしよう」である。

この文章は、女性⁽⁵⁾は男性と対応関係にあり、男性の助け手であると言う。助け手を補完と同質を示すという解釈がある。補完という解釈は納得できるが、同質とは男女平等を説きたい意図から出てきた後代の解釈であろう。男女創造の神話を文字どおり解釈すれば、女性⁽⁵⁾は男性の補完であるという意味で、男女関係に優劣があると解釈する方が素直な解釈である。

アダムは女を得たとき、手放して喜んだ様子を創世記：23で述べているが、ヘブル語に私訳を施してみれば、次の通りである。ついに、これこそ私の骨から造った骨、そして私の肉から造った肉、これを「イーシャー TSHA」と呼ぼう。なぜなら、これは「イーシュ TSH = 人」から取られたのだから。」

この文章の中に zôth というヘブル語の女性指示代名詞 (下線を施した部分) は女 (イーシャー TSHA) を指す。アダムは女性を三回も感歎した調子で指して言っている。(コレ、コレ、コレ)と絶叫して最初の妻を得た彼の喜びを表現しているわけである。新共同訳がこの zôth を二回しか訳していないのは、ヘブル語の勢いとアダムの喜びを削ぐものである。

アダムは女を自分の身体の一部、自分と同じ体 (BASAR) の

存在として愛している。アダムの子（イーシャー）への愛は自己愛を本質とし、彼は自分の体を愛するように女を愛している。ヘブライズムの愛情表現は神によって結ばれた男女が肉（BASAR）において愛を交換するのであり、これがレビ記19:18で「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」（וְאָהַבְתָּה לְרֵעֲךָ אֱמֻנָה）という律法にも通底する。

神に創造された男女は創世記2:24で「それゆえ、男は彼の父と母を捨てて彼女を求め、彼らは一つの肉（一体 BASAR）となるであろう」と言われる。こうして『創世記』では男女愛は自分の体を愛するように相互に愛し合うのである。夫婦一体となるという表現は新約聖書においても踏襲されて、マタイ19:5-6に「二人は一つの肉（eis sarka mian）となるであろう。そこで彼らはもはや二人ではなく、一つの肉（one）である」と言われている。ただし旧約時代には、新約時代のように肉体的愛と精神的愛とはまだ分離せず、むしろ男女の愛は一つの肉体的（BASAR）となることを意味していた。

男女が夫婦となったことは、二人が一体となり、親夫婦から独立した新夫婦が誕生すると考えられた。たとえば創世記2:24に「それゆえ男は彼の父ならびに母を捨てて、彼の女としつかりと結びつくのである」とある。この「結びつく」はヘブル語で DABAQ であり、「ぴったりくっつく、しがみつく」ことを意味していて、男女の肉体的結びつきを具体的に表現するヘブル語で

ある。

しかも男女の一体性と親夫婦からの独立性とは神によって立てられ、神による契約として立てられている。そこでユダヤ・キリスト教の男女関係は、外の社会的存在や人間的権威者によって一体とされず、神の命の息を吹き込まれた男女が神によって立てられた契約によって夫婦となるというのが基本的見解である。

こうした夫婦の一体性と独立性について福沢も類似した見解を持ち、明治三年の『中津留別の手紙』では、『孟子 滕文公上』ないし『礼記』に出てくる「夫婦別有り」を、普通の解釈では夫は外の仕事を行い、妻は内の仕事をするという意味であったのに対して、福沢は意識的に彼独自の解釈を施している。彼は、夫婦を一セットとして「区別正しく定まる」と言い、夫婦は「両者一身同体、共に苦楽を与にするの契約は、生命を賭して背く可らず」と表現している。ただし「宗教の外に逍遙」しようとした福沢は、神による契約を除外していたことは言うまでもない。

ただし旧約聖書の時代には一夫多妻性の社会慣習であったので、夫婦が一对一であるという理念は紀元一世紀の新約聖書の時代に成立するものである。

新約聖書と福沢論吉の対比

ところで霊と肉との区別は旧約聖書時代において徐々に形成されてきた。イザヤ22:1-5に「イシシャイの株から一つの芽が出

てその根から一の若枝が生えて実を結び、その上に主の霊がとどまる」とあり、神の霊は人の上（前置詞at。英語のaboveの意味）に留まって人の中に入らない。捕囚期後のエゼキエル22では神の霊が特別に選ばれた預言者エゼキエルの中に入ったが、これは例外であろう。

ところが新約聖書ではキリストの霊はすべての信仰者のうちに宿ると考えられるようになった。第一コリント3:16では「あなた方は神の神殿であり、神の霊があなた方のうちに宿っているのを知らないのか」とパウロはコリントの人々に詰問している。さらにパウロはガラテヤ5:16-17で「霊（pneumat）によって歩きなさい。そうすれば、あなた方は決して肉の欲（epithumian satōs）を満たすことはない。なぜなら、霊は肉（sarx）に反対しているからである」と指摘し、霊（pneuma）と肉（sarx）との峻別をしている。こうして人間の中に霊と肉の区別が明確に識別され、愛の働きも霊的な愛と肉欲的な愛とに識別されるようになった。第一コリント13:13の「愛（agape）」とガラテヤ5:24の「欲情（patēna）と欲望（epithumia）」の識別にも、新約時代の霊肉二元論が現れている。

霊肉二元論的な愛の識別は、福沢諭吉の著書の中でも類似の二元論が現れる。その幾つかの例を取り上げてみよう。まず明治十六年（一八八三）十月の『日本婦人論』で「本来男女の交情は、単に親愛のみを以て維持す可きに非ず。其親愛の中に自から一片

の敬意を加へて、始めて情を全うす可きものなり」と説いている⁽¹⁰⁾。これは福沢がキリスト教の説いた肉の愛と霊の愛との識別に類似した識別を立てたと考えられる。さらに明治十九年（一八八六）五月の『男女交際論』は言う。

「元来男女の交際には二様の別あり。之に名を下せば、一を情感の交、一を肉体の交とも云ふ可きものならん。肉体の交とは文字の如く両生の肉体直接の交にして、人間快楽の中にててもすこぶる重きものなり。……一步を進めて其交際の全体を視察し、裏より表より其微細の事情を吟味するときは、男女の間柄は肉交のみを以て事を終る可きものに非ず。事に人文漸く開進に赴き、人の心志を用る区域漸く広まりて、心事漸く多端なるに至れば、情感の馳する所も亦広く且つ多端にして、男女の交際単に肉交の一事に止まる可らず。……即ち是れ男女両生の間に南風の薫するものにして、之を名けて情感の交とは申すなり。……肉交必ずしも情交に伴ふを要せず、両様の間甚だしき距離あるものにして、各独立の働を為すのみならず、其性質を吟味すれば、肉交の働は劇にして狭く、情交の働は寛にして広く、而して人間社会の幸福快楽を根本として両様の軽重如何を問ふ者あらば、我が輩は其孰れを重しとし孰れを軽しとして容易に答えること能はず」⁽¹¹⁾

福沢は『日本婦人論』で「親愛と敬意」と言っていた区別を、『男女交際論』では「肉交」と「情交」と言い換える。しかし意味内容は同じである。さらに明治二十一年三月の『日本男子論』

においては「後に爰に配偶を生じ、男女二人相伴ふて同居するに至り、始めて道德の要用を見出したり。其相伴ふや、相共に親愛し、相共に尊敬し、互に助け、助けられ、二人恰も一身同体……」⁽¹³⁾と言ひ、さらにこの夫婦において道德が始めて生じること
を説いて、「男女両性の關係は立国の大本、禍福の起源……夫婦親愛恭敬の徳は、天下万世百徳の大本」と主張して、夫婦の根本的徳が「親愛」と「恭敬」にあるとしている。

もちろんこうした肉交と情交、あるいは親愛と恭敬の二次元の原理は、福沢が私淑したJ.S. Millの著書の中にも発見される。

たとえば『ペンタム』⁽¹⁴⁾に、ミルは高次の原理として人間のうちに内在する「人格の尊厳 personal dignity」「名譽の感覺 the sense of honour」を肯定して、ペンタム的な低次の快樂に対する高級快樂を主張している。ただし福沢はミルの『ペンタム』を読んではないように思われる。また福沢が特に欄外注まで施して熟読した『功利主義』⁽¹⁵⁾（一八六三）には、ミルが「満足した愚か者」と「不満のソクラテス」の識別をしていることは有名である。

対比のまとめ

以上のキリスト教と福沢の夫婦關係に関する対比をまとめて見よう。キリスト教では男女は神による契約によって夫婦とされ、夫婦は一体性と独立性とを獲得する。福沢論吉では夫婦が人間の

レベルの契約によって夫婦とされるが、神という根拠は否定される。しかしキリスト教と同様に夫婦は一体性と独立性が確保される。一方、夫婦間の愛については、キリスト教は神の愛と隣人愛とを説き、他方で神によって創造された *sema* としての肉の愛は肯定されるが、神から切り離され人間中心的な肉 *sema* としての情欲が人間の罪の起因の一つとなると見て、抑制しようとした。これに対して、福沢は夫婦間の愛に親愛つまり肉交と、人格的愛を根拠とした情交ないし恭敬を肯定したが、男性の奔放な性行動を批判した点で、キリスト教の愛の二層論と類似する。一方キリスト教の隣人愛には敵をも愛する愛を主張する点で、福沢はキリスト教を離れ、ミルの思想に重なる。さらにキリスト教と福沢の夫婦關係が契約を重視するのに対して、ミルは功利主義の立場に立つて、ロック以来の契約思想を社会契約の一つとして斥ける。この点でミルの男女論は福沢の男女論と相異してくるのである。

- (1) Francis Wayland, *The Elements Moral Science* (1835), The Belknap Press of Harvard University Press, 1963, pp.xi-xlix; pp.260-286.
- (2) 福沢諭吉『通俗國權論（明治一二年）』、『福沢諭吉全集 第四巻』岩波書店 1959, pp.18-19. 以下、福沢の著作には福沢の名を省いて著作名を記して、全集は『全集 第一巻』のように略記する。

- (3) 旧約聖書の引用は、次の諸書を使用した。K.Eliker et W.Rudolph ed., *Biblia Hebraica Stuttgartensis*, 1977; Alfred

Rahls ed., *Septuaginta*, vol.1 & vol.2, Württembergische Bibelanstalt Stuttgart, 1935.

ヘブル表記としては、印刷の便を考慮してヘブル語の子音と長母音を大文字のアルファベットで表し、短母音を小文字母音で表記する。長母音ワウは ω で表し、長母音エーレック・プラス・イオットは ϵ で表記する。喉音のフィンは α などと表記し、ヘートは α で表記する。ギリシャ語はローマ字表記とし、氣息音は、フクセントは付けないことになった。

- (4) Martin Luther, *Biblia Germanica*, 1545, Deutsche Bibelgesellschaft Stuttgart, (1967), 1983.

- (5) *Die Bibel oder die Ganze Heilige Schrift des Alten und Neuen Testaments nach der Übersetzung Martin Luthers mit Apokryphen*, Württembergische Bibelanstalt Stuttgart, 1978.

- (6) 『旧約新約 聖書大辞典』教文館、一九八九年六月二十日。

- (7) K. Aland, M. Black et al. ed., *The Greek New Testament*, Third Edition, United Bible Societies, 1975; Nestle-Aland ed., *Novum Testamentum Graece*, Deutsche Bibelgesellschaft, 27 revidierte Auflage, 1993.

- (8) 『中津留別の書』全集 第二十巻 pp.50-51. 『中津留別の書』は明治三年に書かれた福沢の一番最初の男女論と言いうことができる。こゝで福沢は夫婦の平等、一体性、独立性を説いたのである。

- (9) 『新女大学』全集 第六巻 p.519.

- (10) 『日本婦人論』全集 第五巻 p.470.

- (11) 『男女交際論』全集 第五巻 pp.589-590.

- (12) 『全集 第五巻』p.612.

- (13) J. S. Mill, *Bentham in John Stuart Mill on Bentham and Coleridge*, Harper Torch Books, 1962., p.67. 福沢が本書を読んだ

証拠はない。

- (14) J. S. Mill, *Utilitarianism*, in *Utilitarianism, Liberty, and Representative Government*, New York: E. P. Dutton and Company, INC. London: J. M. Dent and Sons, LIMITED., *The New American Editions of Everyman's Library*, 1951, p.12. 福沢は本書を丹念に読み、欄外に注を付けている。彼の使用した本は慶応義塾福沢研究センターに保存されている。福沢が恐らく読んだと考えられるミルの本はこの外で“*On Liberty*”, “*Representative Government*”, “*The Subjection of Women*”, “*Principles of Political Economy*”, “*Three Essays on Religion*” などである。最後の本は少なくとも福沢の高弟小幡篤次郎の訳した訳書『彌爾 宗教三論』丸屋善七、明治十一年（一八七〇年）は読んだと思われる。

(こゝに)すみ・たかし、近代日本思想史・比較思想

慶応義塾大学名誉教授)